

話せずとも、通じた気持ち 東京・台湾、重度障害の2人対面 互いの「話法」で



天島大輔さん（右から3人目）と莊馥華さん（2人目）。体の動きから言葉を読み取る通訳者がそれぞれの両脇についた＝22日、台湾・新北市、大久保真紀撮影

重度の障害でひとりでは動くことも話すこともできない東京都武蔵野市の天島（てんばた）大輔さん（31）が台湾を

訪れ、自分と同じように意思疎通を図るには通訳者が必要な台中市の詩人、莊馥華（チョワンフーホワ）さん（29）と対面した。体を使ったわずかな動きでそれぞれの言語で言葉を紡ぎ出し、日本語と中国語の通訳を介してコミュニケーションをとった。

「声にならないぐらい感激している」。22日午後に荘さんに会った天島さんは、面会場所になった台北近郊の新北市の障害者施設で、喜びを表現した。

2人はともに視覚も、色と物の存在を識別できる程度で、非常に不自由だ。2人の障害の状況やコミュニケーション方法を獲得してきた経緯は似ている。

天島さんは14歳のときに心肺停止状態になったのが原因で障害を負った。半年間だれにも自分の意思を伝えることができなかったが、母親（60）が編み出した「あ・か・さ・た・な話法」で、50音に体の一部をわずかに動かすことで反応。1文字1文字を紡ぎ出し、意思疎通を図る。現在は立命館大学大学院先端総合学術研究科（京都市）の博士課程で、障害者のコミュニケーション方法について研究する。

一方の荘さんは10歳のときに自宅が火事になり、一酸化炭素中毒になったのが原因。こちらも発話は全くできず、母親（51）が言語療法士と協力して発音や抑揚を数字の組み合わせで表す文字盤を作成。荘さんの顔や目の動きで文字を読み取る方法を見つけた。体験を伝える講演活動を母親と二人三脚で続ける。

今回の対面は天島さんが1年半ほど前、荘さんを追ったドキュメンタリー映画を見たのがきっかけだ。2人は2時間以上にわたり、これまでの苦労や悩み、通訳者の重要性、今後について語り合った。

荘さんは「子どものころにとっても幸せだった思い出が支えになっている。自分のできることを精いっぱいしていきたい」と話した。

互いの存在を確認した天島さんは「意思疎通が難しい障害者についての研究は僕のライフワーク。今回もその一環だが、来たかいがあった」と興奮気味に話し、再会を誓った。

（台北＝編集委員・大久保真紀）